

会 報

兵 小 長

第 159 号

令和4年12月13日
兵 庫 県
小 学 校 長 会

令和四年度県教委との教育懇談会報告

事務局長 小 山 光 一

今年度も、県教委との教育懇談会を二回開催することができました。昨年度は、出席者を制限せざるを得ない状況でしたが、今回は、理事・地区長会のメンバーにも出席いただきました。（懇談会の内容だけでなく会の空気感までも感じていただけたと思います。）

関係各課との意見交換から伝わってきたのは、県教委のみなさんの真摯な気持ちでした。校長会の思いや現場の願いと同じ思いだけれど、それに十分応えることができない担当者の苦しさを感じました。

一方で、各項目についての意見交換や真に必要な施策・活動のあり方についての議論を通して、学校現場の現状と課題を共有できた意義は大きいと感じています。

一、八月十七日教育懇談会

※二年前までは「要望書説明会」

以前は、小学校長会から要望書の説明をするのがメインとなり、意見交流があまりできなかったことから、昨年度より、新しくランキング形式を取り入れた懇談会資料を作成し、各項目についての現場の願いの強さを届ける形

に変えました。当日の懇談会では、各項目について意見交換を図りました。

△参加者▽

・校長会は理事、地区長、へき地教育代表、教育懇談会準備委員の計二十一名

・県教委は村田教育次長をはじめ各課より計二十名

二、十月二十八日教育懇談会

※二年前までは「要望書回答会」

先に県教委各課から各項目についての説明（回答）を聞き、その後、校長会から質問をしていく中で、各項目についての現場の声を届けました。お互いの意見を出し合うことで、教育を取り巻く現状と課題を共有し、限られた予算の中、本当に必要な取組は何かを探りました。

△参加者▽
・校長会は前回の参加者十各委員会副委員長・各部副部長の計三十一名
・県教委は義務教育課長はじめ、関係各課より計二十二名

三、参加者の感想

県教委各課の発言内容について、文書による配付は控えてほしいとのことから、参加者の声を紹介することで、

報告に代えたいと思います。

○今回、初めて教育懇談会に参加させていただきました。現場と行政が直接意見を交わすことができ、大変有意義な時間であったと思います。また、県内各地の様々な課題をお聞きすることができたのも貴重な経験でした。

○自然学校のことをはじめ、現場の生の声を聞いてもらったのは、大変意味があったと感じました。また、兵庫の教育をよくしたいという思いは、我々現場の校長と教育委員会事務局の方々と同じだと感じました。予算をはじめ様々な制約がある中で、それぞれの思いや現状をしっかりと伝え合い連携して子どもたちにとって本当に必要な取組を進めていきたいです。

○対県要望からようやく教育懇談会という形になってきたかなと思います。

○県下で集約した要望を伝えることも大切なので、一回目はこちらからの要望が多くなるのは仕方がないと思います。二回目は、一回目よりさらに具体的な現場の声を届けられたのではと思います。

○へき地教育について要望する場が教育懇談会しかないことを認識したい。

○子どもたちを念頭に置き、厳しい予算配分の中、現場が混乱しないように県の施策を伝え、また、現場の状況を伝え理解し合おうと努力する場となったことは大変良いと感じました。過疎化におけるへき地での勤務などは、事務局としても何とかしようとしている考えが伝わりました。また、学校現場の大変さも親身に聴いていただいている雰囲気も感じました。

○兵庫県へき地・複式教育研究連盟と

しては、へき地教育振興法に基づき、へき地・小規模校において、教育の推進を図るにあたり、現状の課題を伝えるための貴重な懇談会となりました。今後も引き続き課題解決に向け、懇談をお願いします。

○兵庫に育つ子どもたちのために、それぞれの地で日々学校経営に当たられている校長先生方の思いを何とか教育懇談会の場で伝えようと臨みました。とはいっても、兵庫は広く、それぞれの学校で抱えている課題も多種多様で、十分に伝えることの難しさを改めて感じました。

○県教委当局の回答を聞いてみると、一番出てくる言葉として「財政上困難」という言葉で括る回答が多く、前向きな話にならなかったのが残念です。学校現場で創意工夫して取り組むにも限界があります。何とか、国、県、市、町の教育予算が増大し、充実した予算が組まれた上で、教育が行えることを切に願います。

○今後も「兵庫は一つ」を合言葉に学校現場の実情を伝え続けていかなければならないし、伝え続けることで兵庫の教育が前進すると信じて、教育懇談会を続けていかなければと強く思いました。

四、今後に向けて
兵庫型学習システムのあり方、自然学校のあり方については、多くの意見が出ました。県が進める新規事業の事前協議を含め、今後も、教育委員会と校長会と連携を一層密にし、兵庫の教育の充実に向けさらに取組を進めて参ります。

（神戸市立東須磨小学校長）

夢を描き 夢を育む

副会長 白川 智喜

「みんなは学校教育目標を言える？」
校内研修会での職員の発言から、取組はスタートしました。本校ではすべての職員で創りあげる学校ブランドデザインの取組を進めています。

私も思い返してみると、目の前のごとに忙殺され、学校教育目標を意識せずに過ごしてしまった日々でした。それでは、学校としてまとまりのある教育活動を行うことはできていなかったと、今更ながら反省しています。

本校の学校教育目標は「夢を描き夢を育む学校」。その学校教育目標を実現するためにはどうすればよいか、どのような教育活動を進めていけばよいか、職員のあり方はどうなのか、など数十回にわたり、様々な機会に熟議を重ねてきました。

目の前の子どもたちと日々接している学級担任からは、本校の子どもたちの素晴らしいところ、もつと伸ばさなければならぬ所が具体的な内容と共に示されました。一人職種の職員からは、その専門性から目指したい学校のあり方について話がされました。

未来を生きる子どもたちに、どのような資質能力を育んでいかなければならないのか。そのためには学校としてどのような取組を進めていくべきなのか。キャリアの短い職員も管理職も、同じ目線で意見を交換し続けました。

その結果、本年度は「相手を受容し大切にすること」「自分に自信をもつこと」「目標を自己決定する力」「思い

をもって改善する力」「最後までやりとげる力」の五つを本校で重点的に育成する資質能力とし、それらの育成をすべての教育活動で進めています。

学校という組織は、ボトムアップであるべきだと私は考えます。一人一人の職員の「こんな学校にしたい」「こんな子どもを育てたい」という思いを大切に具現化することが、学校という組織を活性化することです。そして、それぞれの能力を最大限に発揮し、大きな成長につながるからです。それを支えるための環境を整えることこそが校長の仕事ではないかと思えます。

本校では、子どもの自己決定を大切にしていきますが、それは職員も同じです。職員が自己決定し、職員が創りあげる学校。そのような学校を目指しています。そのためには、それぞれがお互いをリスペクトすることが大切ですし、それぞれの多様な価値観を尊重することが重要です。

学校ブランドデザインの取組を進める中で、職員が大きく育っているのを実感しています。そして、学校というチームとしてのパフォーマンスが高まっていることを嬉しく思います。

豊かな未来を創りあげるのには子どもたちです。そのような子どもを育てる学校にしていきたいと思えますし、学校に関係するすべての者が豊かな人生を歩める、そのような学校にしていきたいと心から思います。
(西脇市立楠丘小学校長)

「挑戦する」ということ

副会長 池上 朗

先日、何気なくテレビを見てみると、NHKのエマージェンシーコール緊急通報指令室「東京」が放映されていました。「救急ですか？消防ですか？」の応対から始まる「命に対峙する現場」の予断を許さぬ状況に圧倒されました。眼前で倒れている家族に動揺し、「どうしよう、どうしよう。」と繰り返すパニック状態の通報者。救急隊が到着するまで「落ち着いて。わたしと一緒にしましよ。」と声のみの支援で行う心臓マッサージ。話すことができない方へ「受話器を三回たたく」対応……。まさに命に対峙しているという緊張感がひしひしと伝わってきました。でも、中には、いたずら電話や「まだ救急車が到着していない。何をしているんだ。馬鹿と違うか。」という電話も。「コロナ禍であっても、救急車はすぐに来て当たり前と思われていますからね。」

という職員のつらそうな表情と言葉に胸が締め付けられました。職員が過酷な状況下でどれだけ一生懸命に取り組んでも、通報者の思いに応えられなければ、全てを無にされてしまうような冷たい言葉が返ってくることもあるのです。

学校の教職員も、厳しい保護者からの指摘に心が折れそうになることがあります。「すべて〇〇の責任だ。どうしてくれらんだ。」と責められたり、「もう信用できない。」と拒否されたりすることもありません。それでも、保護者と学校が同じ方向に、同じ歩調で進

んでいけるよう努力を続けていかねばなりません。
北京オリンピックで四回転半に挑戦したスケートの羽生結弦さんは、「羽生さんにとって挑戦とは何ですか。」という記者の質問に対し、次のように答えています。「別に僕だけが特別だとは何も思っていないで、別に王者だつたからとかではなくて、みんな生活の中で何かしら挑戦しているんだと思います。それが大きいことだったり、目に見えることだったり、報道されることだったり。それだけの違いだと僕は思っています。守るということだって挑戦なんだと思うんですよ。だって家族を守ることって大変だと思えますし、何かしらの犠牲だったり、時間が必要だったりもしますし；、だから、何ひとつ挑戦じゃないことなんて存在していないんじゃないかな。」と。

新しいことに挑むことだけが挑戦ではなく、何かを一生懸命に守ることも同じ挑戦であり、現場で対峙するということに変わりはないのです。
急速なICT化や配慮が必要なコロナ対策、深刻な教員不足など、新たな課題に追われ、多忙化している教職員。そんな今だからこそ、的確な判断と勇氣ある決断を伴う意思決定をし、挑戦し続けなければなりません。

今一度、私は校長として「挑戦する」という言葉を見つめ直しています。大切なものを見失わぬように。
(姫路市立城北小学校長)

何よりも授業

副会長 森 広樹

令和四年十月二十一日(金)、コロナ禍が十分に収まらない中、第六十九回近畿小学校社会科教育研究協議会を本校で開催しました。四百人以上の参加者があり、先生方の授業を生で見たという要望を強く感じました。本研究会で多くの驚きの声が聞かれたのは「全学級授業公開」でした。(特別支援学級を除く)

前年度に行ったプレ大会(近社研)では、各学年一学級の授業公開をしました。授業公開者の授業力が向上したことは言うまでもありません。授業者とそれを支える授業支援者では、その心的負担は違います。他人に見られるという負荷がかかると、その分、授業技量は大きく成長するからです。

授業は毎日の行為だからこそ、その授業力向上という願いは切実であり困難です。多忙な生活の中、良い授業を行うためには弛まぬ努力と、「これくらいでいいか」と妥協してしまう自分に勝つ精神力が必要で、誰もが経験する眼目をおこすりながらの教材研究や授業準備。その積み重ねの一つ一つが良い授業につながると分かっています。なかなか出来ない現実があります。強く意識しないと、授業は作業になりがちです。忙しい毎日の中、教える行為が流す作業になっていることもしばしばです。

しかし、学校全体で全員が授業公開を行うと、教材研究や指示・発問の仕方、板書計画、教室掲示などを学年単位で行うことからは、学年力の向上が見られるようになり、その集合として学校力の向上にもつながります。

研究会後、本校教員から、「より深く発問を考えるようになった。」「若手教員が社会科だけでなく全授業を深めることができるようになった。」「子どもが自ら動く仕組みを考えられるようになった。」「子どもの成長が挙げられました。同時に、「子どもの自己肯定感が高まった。」「根拠に基づき話せる子が増えた。」「など子どもの成長も挙がりました。苦労が大きかった分、そこで得た財産の大きさに教員は気づいています。

研究会を行うことは学校にとって、大きな負担になりかねません。本校でも研究会が近づくにつれ、先生方の退勤時刻が遅くなったのが実情です。しかし、その分、教員の授業技量や学級経営力が向上したのも事実です。

働き方改革・業務改善が叫ばれる今だからこそ、授業力の向上に目を向けることが必要だと思っております。外国語・ICTスキル構想……と時代の要請に応じて、教員の業務は年々増えていきます。しかしながら、教員の本務は授業です。授業改善や良い授業を行うために努力することは教員の業務に他なりません。今も昔も学校経営の基本は良い授業の実現です。「何よりも授業」を共有できる教職員集団を形成することが、これからの時代の校長の挑戦ではないでしょうか。

(神戸市立西須磨小学校長)

地区の動き

阪神地区だより

阪神地区区長 岩 永恒和

阪神地区小学校長会は、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市、猪名川町の七市一町の百七十八校で構成されています。(宝塚市で統廃合があり一校減りました。)

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響はあるものの、ウィズコロナに向けてできる会合はできるだけ開催する一方、勤務時間の適正化の観点から省けるものは省く方向で活動を進めました。

例年参集形式で行っていた総会は、総会の部分を「書面総会」扱いとし、実際には行わないものの、研修会は阪神地区校長会としてのまとまりを意識するとともに貴重な研修の場として、

中播磨地区だより

中播磨地区区長 岩 田 義之

中播磨地区小学校長会は、姫路市と神崎郡三町(福崎町、市川町、神河町)の七十七小学校と三校の義務教育学校、合計八十校で構成されています。本地域は、瀬戸内海の島々から中国山地のふもとまで多様な地域が広がっています。都市部や工業・漁業・農業・山間地域等、様々な特色や風土・文化がある中で、それぞれの教育課題を交流し、研究と実践を積み重ねていきます。

今年度、実に三年ぶりとなる総会・研修会を五月二十三日に開催しました。研修会では、講師として播磨西教育事務所長 八木康文様をお迎えし、播磨西教育事務所の新たな取組や、学校長

五月二十七日、川西市キセラホールで立命館大学教授 宮口幸治氏を講師に招き、「どうしてもキーキを切れない子どもたち」と題して講演をいただきました。

年七回の役員会を各市町持ち回りで開催し、阪神教育事務所からの指導伝達、各市町教育長からのご挨拶をいただき、学校での新型コロナウイルス対応や教職員の人員確保の課題の現状などの情報交換を行いました。また、「兵小長ありかた検討」の方針に基づき権限移譲への対応についても話し合いました。

(川西市立川西小学校長)

今後も「阪神は一つ」を合言葉に、様々な課題を七市一町の知恵を出し合い、克服に努めてまいります。

としての心構え等についてご教示いただきました。また、七月と十一月には、播磨西教育事務所のお二人の副所長様を講師としてお迎えして二度の役員研修会を行いました。

学校現場を取り巻く課題は、新型コロナウイルスの感染予防対策や様々な制限がある中で教育活動の推進、GIGAスクール構想に基づいた一人一台端末を活用した個別最適な学びや協同的な学びの構築、子ども達の学力向上、教職員の人材育成や働き方改革の推進等、多岐にわたります。

(姫路市立中寺小学校長)

但馬地区だより

但馬地区長 村上裕樹

但馬地区小学校長会は、豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町の五市町、五十九校（義務教育学校一校）で構成されています。

令和二年度からの二年間は、総会や研修会が紙面開催となり、新しく仲間となった方々との面識がないなど、つなりの欠如が課題となっていました。今年は何としても参集型で実施したいという強い思いで臨み、春も秋も参集とオンライン配信とを併用するハイブリッド型の総会・研修会を実施しました。集うことで、一体感、達成感を感じました。ウイズコロナの新しい活動様式が確立できたと考えます。

丹波地区だより

丹波地区長 小田環

丹波地区小学校長会（以下丹小長）は、丹波市と丹波篠山市の二支部三十七校で構成しています。

本年度、「自ら未来を拓き、ともに生きる喜びと豊かな社会を創る子どもの育成」をテーマに、丹小長総会を開催し、丹波地区の小学校・特別支援学校の教育を充実・発展していくための意思統一ができました。

コロナが終息しない今、学校は学びを止めずにどのように教育を推進していくかが大きな課題であります。一人一台端末等のICT環境の活用下で新しい学びが始まる中、八月に熊本大学

また、これまで以上に連携が重要であると考え、但馬地区会員に実施したアンケートを元に兵小長の理事・地区

長会で地区報告を行うとともに、アンケート結果を各会員にも送付し、学校運営の参考にさせていただきました。LGBTQへの対応など、常に課題意識を持って取り組めたと感じています。

但馬地区は、香美町で小学校の統合計画が発表されるなど、過疎化、少子化にどう対応していくかが、今後の最重要課題と認識しています。

豊かな自然、人と人の温かいつながりなど、但馬の強みを教育に生かす学校運営をめざし、地区会員の連携を一層進めていきたいと思えます。

（養父市立広谷小学校長）

地区の動き

大学院の前田康裕特任教授を迎え「今あらためて問われる教師のあり方を管理職としてどう指導するか」という演題で丹小長夏季研修会を行いました。

この課題は、学校も、保護者も、子どもたち自身も意識を変え、力を合わせる必要があります。さらに、学校、地域、家庭が子どもに関わることによっても、子どもたちが学ぶ喜びを見いだすことも大切です。そして、校長のリーダーシップのもと「人」を育てていくことの重要性を再認識しました。

これからも丹小長は、連携を深め教職員を育て、子どもたちの「生きる力」を育む活力に満ちた魅力ある学校づくりに努めるよう邁進してまいります。

（丹波篠山市立八上小学校長）

淡路地区だより

淡路地区長 三好一成

淡路地区には洲本市、淡路市、南あわじ市に三十九校の小学校と十五校の中学校があり、小・中学校統合して全淡小中学校長会として組織し活動しています。

令和四年度の活動は、五月に予定していた総会はコロナ禍のため書面決議による実施になりましたが、十一月二十五日には大阪大学名誉教授小野田正利氏を講師に招き全淡小中学校長会研究大会を、一月二十日に全淡小中学校長会研修大会を対面式で計画しています。

さて、淡路地区ですが京阪神と明石海峡大橋により繋がりが通勤圏内になり近年はリゾート関連施設の建設など淡路島を訪れる観光客も増加傾向にあります。島外への流出人口も増加しており、深刻な少子高齢化により、島内三市ともに児童

生徒数の減少が大きな課題になっています。

また、今年度は、新学習システムにおいて優先教科の指定や未だ完全に終息していないコロナ禍の影響を受け自然学校、修学旅行等様々な行事がコロナ禍前のような形での実施が難しくなっており、今後校長会として連携を密にし、島内三市の現状を把握し、児童生徒にとつて、より効果的な教育活動が推進できるように活動しているところです。

最後に、いつ終息するのかわからないコロナ禍等将来の見通しが見えにくく、変化の激しい時代が続くものと予想される中、学校においても新学習システムの実施、児童生徒数減少による人材不足、勤務の適正化等課題は山積していますが、全淡小・中学校長会として智慧を結集し、島内各校の特色ある教育活動が推進出来るよう、前向きかつ柔軟に活動していきたいところです。

（南あわじ市立倭文小学校長）

編集後記

調査広報副委員長 岡本潔政

コロナ後の教育の在り方を模索しながらも、現実的な課題と向き合い、学校運営に尽力し続ける日々が続いています。

このような時だからこそ、兵庫に集う同じ立場の者同士が丸となり知恵を出し合い邁進することで、新たな時代への一歩を踏み出すことができると思います。

さて、「ほだし」という言葉は、束縛という意味ですが、漢字で表すと「絆」となり、きずなとして、現代に引き継がれています。先月末、皆様

から頂いた現場の抱える状況を教育懇談会資料としてまとめ、県教育委員会事務局との教育懇談会を終えました。従来の対県要望と異なり、子どもたちに生きる力を育むための絆を深めるものになったと感じています。

今回、その報告や様々な教育課題に向かわれる姿を掲載させていただきました。ながら、兵庫に集う仲間の心合わせに微力ながらも役立てることを願っております。

最後になりましたが、校務ご多用の中、本会報に玉稿を賜りました校長先生方に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

（新温泉町立浜坂北小学校長）